下田歌子の短歌を英訳する試み

村上 まどか

1. はじめに

実践女子学園の学祖・下田歌子（1854 – 1936）は歌詠みの名手として知られている。幼名・平尾鉐（せき）が弱冠18歳で明治時代の宮中に仕えて間もなく、美子（はるこ）皇后から和歌の才能を称えられ「歌子」の名を賜ったという逸話は、つとに有名である。

歌子の短歌を初めて英語に訳した功績は、1907年のアーサー・ロイドと松浦一による『皇國（みくに）ぶり』であるが、実に110年以上を経ている。かつまた、御題「春月」を詠んだ代表作以外、あまり著名な歌は収録されていない。本稿は、短歌は英語では形式的にどのように翻訳するべきかを考察した上で、歌子によるいくつかの短歌を新たに英訳する試みである。

2. 短歌の英訳形式

2.1. 短歌は何行で英訳すべきか

定型が5・7・5・7・7の31文字から成る短歌を英語では何行に訳すべきかについては、次の3通りの主張がある。第1は、短歌は1行詩であり、したがって1行で英訳すべきという佐藤（1991；1993a；1993b）の説である。佐藤（1993a：77）は、和歌の5音7音はあくまでも韻律であり、時には一つの語彙が境目を越境する「句またがり」も見られるという点を主な根拠に、

> 日本の五、七という文字単位はそれだけでは「行」とはいえない、…ぼく［は］、短歌も、その孫にあたる俳句も、一行詩と考えるべきだと思い、…書き手自身が明確に行分けして印刷されたものでない限り、一行に訳すべきだと思う

と述べている。

しかしながらこの翻訳法は、（元の短歌は1行に収まるとしても）英訳すると文字数と紙幅の都合上、結局は2行にまたがってしまう。Sato & Watson（1981）において訳出された短歌は、ほとんどすべてそう見受けられる。

第2の主張は、上の句と下の句の2分割を念頭において、短歌を2行に英訳するという石原（2012）の説である。彼女は与謝野晶子の短歌を4行で英訳した業績を経て、1997年にはラインフェルドとともに『対訳・百人一首』において短歌を2行で英訳している。[1] 例えば第1首の

秋の田のかりほの庵（いほ）の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ　　天智天皇

は、次のように訳される（石原・ラインフェルド（1997：3））。

In the fall field, a shelter for the harvest:
Dew drips through the weave of the roof, wetting my sleeve.

石原（2012：129）は短歌における上の句と下の句の関係を特に重要と考え、音節数は度外視して、（他の歌では固有名詞はそのままに）全般に意訳を施している。

このようにすれば大多数の短歌は2行に収まるのであるが、やはり紙面の制約上、行末が次の行にはみ出してしまうものも少なくなく、上記の例ではsleeveを改行して右寄せで載せている。結局、1行訳も2行訳も同じ問題を抱えることとなる。

第3は、5・7・5・7・7に即して5行で英訳するというものであり、筆者が調べた限りではこれが多数派である。古くはPorter（1909 / 復刻版1979）が『百人一首』を5行で翻訳しており、スタム（1988 / 新装版2017）は俵万智の『サラダ記念日』を、どの歌も例外なく5行で訳している。リービ（2014）も『万葉集』の抄録をおおむね5行で訳している（中には3行、4行、6行の訳出も見られる）。

マクミラン（2017）/ MacMillan（2018）も『百人一首』を5行で英訳しているが、決して固執しているわけではない。マクミラン（2017：27）/ MacMillan（2018：14）による第10首の英訳では、語尾が -ing形と -en形のたびに改行することによって、それぞれの動きや人々が独立し、絶妙な間（ま）が保たれているように見受けられる。

これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関　　蝉丸

So this is the place!
Crowds,

coming
going
meeting
parting,
those known,
unknown –
the Gate of Meeting Hill.

しかし彼が5行以外で訳しているのはこの歌と、1語ごとに改行して視覚的な縦長を狙った柿本人麻呂の第3首「長々し夜」等に限られ、あくまで変則的である。

本稿では、1行、2行に英訳が収まりきれなくなるのを避けるためもあるが、多数派にしたがって短歌を5行で訳すことにする。

2.2.　短歌は何音節で英訳すべきか

音節とは、通常は母音を中心として前後に切れ目があると感じられる音声的な単位である。これに基づいて拍をとる言語のリズムは、英語と日本語で大きく異なっており、短歌を英訳するにあたっては、その違いに留意する必要がある。

日本語の音節は、音韻論的にはモーラと呼ばれる。モーラとは、音節が均等かつ平板に連続して等時性を保ちながらリズムをとる拍である。概してひらがな・カタカナ1個が1モーラに相当し、撥音「ん / ン」、促音「っ / ッ」、長音として伸ばす「う / ウ、ー」も、厳密には他のモーラよりやや短いが1モーラに数えられ、拗音「ゃ / ャ、ゅ / ュ、ょ / ョ」はモーラを成さない。例えば、次の語は7モーラ7拍である。

コ	ミュ	ニ	ケ	ー	ショ	ン

これに対して、英語のリズムは強勢をもって1拍となし、弱い音節は拍に数えられない。語の中で最も際立って聞こえる音節に第1アクセント、次によく聞こえる音節に第2アクセントがあるとすると、第1・第2アクセントが強アクセントであり、強勢とみなされる。第1アクセントを◉、第2アクセントを●、弱アクセントを・で表わすと、次の語では5音節2強勢2拍であることがわかる。（竹林・斎藤（2008：VI））

com	mù	ni	cá	tion
・	●	・	◉	・

この1例を見ても、英語では日本語よりも音節も拍も少なくなる。佐藤（1993b：

85–86）によれば、

> 日本語を英語にごく普通に訳せば、英語のsyllable数は平均して日本の文字数の七〜八割になる。つまり、短歌の三十一文字の場合、二十二から二十五のsyllable数になる。…逆にいうと、三十一文字の短歌を三十一のsyllableに訳したのでは、原文にはないことばを加えると必要が出てくる

のである。

実際、Rodd & Henkenius（1996）は『古今和歌集』をおしなべて31音節で訳しており、それはそれで驚嘆に値する技巧である。その中の一首を挙げると、

はかなくて夢にも人をみつる夜はあしたの床ぞおきうかりける　　素性法師

though / fleet/ing / were / the	5音節
dreams / in / which / I / saw / my / love	7音節
all / the / lone/ly / night	5音節
un/hap/py / I / am / to / rise	7音節
from / my / lone/ly / bed / at / dawn	7音節

である。佐藤（1993b：85）はこれを評して、the dreamsの句またがりが目を引くのもさることながら、元の歌には見当たらないlonelyが2度も使われているのは、単に音節数を合わせるためであると述べている。

マクミラン（2017：218）もまた、

> 日本の古典詩を英訳するにあたっては、自由詩（フリー・ヴァース）の形が一番しっくりする。もっとも、日本の古典詩および現代の短歌…は、和歌・短歌の「5・7・5・7・7」と同じ音節数で訳されるべきだと主張する向きもある。この意見に従えば、すべての訳は同じ31音節で行われる訳だが、それは英詩においては不自然かつ無意味な束縛となるだけだろう。

と主張している。ちなみに彼が訳出した100首の音節を数えてみると、31音節で訳された短歌は皆無であり、「5・7・5・7・7」に最も近似したものは次の歌であった。

夕されば門田の稲葉おとづれて蘆のまろ屋に秋風ぞ吹く　　源経信

An / eve/ning / draws / near　　5音節
In / the / field / be/fore / the / gate　　7音節
The / au/tumn / wind / vis/its,　　6音節
Rust/ling / through / the / ears / of / rice,　　7音節
Then / the / eaves / of / my / reed / hut.　　7音節

これを見ると、確かにこの訳が31音節に最も近いからといって、他の訳詩より優れているとは言えそうにない。

以上の論議を踏まえ、本稿では短歌を音節にこだわらず、自由律で英訳することとする。

2.3.　短歌の英訳に脚韻は必要か

脚韻とは、2行以上の行末で、別個の語が同一の母音を含んだ同音を繰り返すことであり、英語圏では詩の技巧として重用されている。筆者が見た限りでは、古い時代の英訳に脚韻を施す傾向が高い。初版が1909年というPorter (1979) は、『百人一首』を5行自由律で訳しているが、実に100首すべてにおいて、2・4・5行目の行末で見事に脚韻を踏んでいる。[2] 例えば天智天皇の第1首は、次のように訳されている (Porter (1979:1))。

秋の田のかりほの庵(いほ)の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ　　天智天皇

OUT in the fields this autumn day
　They're busy reaping grain;　　[greɪn]
I sought for shelter 'neath this roof,
　But fear I sought in vain, –　　[veɪn]
　My sleeve is wet with rain.　　[reɪn]

ロイド・松浦 (1907) が歌子の短歌や当時の詩歌を英訳した『皇國ぶり』においても、脚韻は厳格に施されており、歌子の最も有名な作品である「春月」の4行訳では、1・4行目末、2・3行目末においてそれぞれ韻が踏まれている (ロイド・松浦 (1907：7))。

手枕(たまくら)は花のふぶきにうづもれてうたた寝さむし春の夜の月　　歌子

THE MOON OF SPRING
My pillow, my own arm,　　[ɑ:m]
Deep buried in the snow　　[snoʊ]

Of storming blossoms; lo, [loʊ]
Above the moon shines calm! [kɑ:m]

ここではsnowを行末にするために、the snow of storming blossomsという一塊の名詞句を中途のofから改行したのがやや不自然に見受けられる。[3]

100年以上前の英訳詩は脚韻に固執していたようだが、現代における短歌の英訳は、リービ（2014）、スタム（2017）、マクミラン（2017）/ Macmillan（2018）のいずれも脚韻を用いていない。本稿でも、現代の傾向に倣って脚韻は踏まないこととする。

3. 短歌をめぐる歌子の略歴

この節では、次節で英訳する歌子の５首の短歌について、歌子の略歴を述べていく。まずは『下田歌子先生傳』（以下『伝記』）（1943）等を参考にして、筆者が作成した略年譜を掲げる。

短歌を中心とした 下田歌子 略年譜

		満年齢	
安政1	1854	0	旧暦8月8日、現・岐阜県恵那市岩村町生まれ
5	1858	3	元旦に人生初の短歌を詠む、文学と詩歌をたしなみ始める
万延1	1860	5	「夕立の後」の歌を詠む、後年の歌集『雪の下草』に収録
明治4	1871	16	上京する道中で「綾錦」の歌を詠む、東京で和歌を八田知紀（はったともので）に師事する
5	1872	18	10月、八田師匠の推薦により宮中に出仕、2か月後、美子（はるこ）皇后（昭憲皇太后）から「歌子」の名を賜る
6	1873	18	「春月」を詠んだのは、この年の春と推測される
8	1875	20	歌人・税所（さいしょ）敦子（1825-1900）に出会い、故・八田師匠の同門として懇意となる、生涯を通じて短歌を贈り合い、友情を深める
12	1879	25	宮中を辞し、剣客・下田猛雄と結婚
15	1882	28	自宅に下田学校改め桃夭女塾を開き、古典や和歌を教える
17	1884	30	夫の病没後、皇后の要請により再び宮中出仕
18	1885	31	華族女学校（のちの学習院女子部）を創設し、学監兼教授に就任
32	1899	44	実践女学校創立
昭和6	1931	76	東京帝大病院に約40日間入院、「道を伝へむ」はこの頃の作と推測される
7	1932	77	喜寿を記念した歌集『雪の下草』上梓
10	1935	80	「綾錦」の歌が彫られた顕彰碑が、生誕地に建立
11	1936	82	肺水症で逝去

3.1.　幼児期の歌

「栴檀は双葉より芳し」の好個の例であった歌子を、『伝記』(p. 7) は、「比倫に絶した神童であって、五歳にして早くも句を作り、六歳にして歌を詠み、七歳にして巧みに詩を賦した」と記している。しかも当時の年齢は数え年であるから、これより幼くして詩歌を物していたことになる。

1858年の元旦は、歌子はお年取りをして5歳、満年齢で3歳の正月であった。初めての短歌が出来たと喜んで、祖母・貞(さだ)の前で

元旦はどちら向いてもお芽出たい赤いべべ着て昼も乳呑む　　鉐(せき)

と唱えてみせると、「伝へ伝わって周囲一党の快笑の話題」(『伝記』p. 58) となったそうである。なお、歌子がこの年まで母乳を飲んでいたというのも、『伝記』によれば母乳を長く飲ませれば丈夫な子に育つという当時の俗説に基づいた事実であり、この歌には実感がこもっていたということである。

このように人生初の短歌は単に愛らしく純真な作品であったが、5歳で詠んだ次の歌には、もはや誰も笑う者はいなかった。

夕立のはれて薄霧立ちこめて雲ゐに見ゆる山の峯かな　　鉐(せき)

この歌は下田 (1932：5) に収録されており、『伝記』(pp .61–62) はこれを、数え年で6歳の夏の作として驚嘆しながら言及している。山々に囲まれた生誕の家において、近景と遠景を対照的に、幼女がこれだけ美しくとらえたのであった。

3.2.　少女時代の歌

世は明治が開け、勤皇思想の父・平尾鍖蔵(じゅうぞう)（信左衛門）が新政府に登用されると、1871（明治4）年4月、最初に呼び寄せられた家族は満16歳の娘・歌子であった。美濃国から東京へ籠に揺られながらの道中、歌子は「東路の日記」という、短歌をちりばめた紀行文を著わしている。[4]

それらの中でも圧巻な一首は、

綾錦着てかへらずば三國山またふたたびは越へじとぞ思ふ　　歌子

という、凛々しい凱旋の歌である。この作品は後の1935年、碑に彫られて生誕地・岐阜

県恵那市岩村町に顕彰碑として建立され、除幕式には歌子自身も参列した。亡くなる1年前のことであるから、まさに歌子はこの歌とともに職業生活を歩み、この歌をもって人生を全うしたと思うと感慨が尽きない。[5]

話を上京時に戻すと、歌子は東京で歌人・八田知紀（はったともの り）に和歌を師事し、師匠らの推挙を得て1872年18歳で宮中に女官として出仕した。明治天皇・皇后は歌会を好んで頻繁に催していたが、そこでの歌子はたちまち頭角を現し、御題「春月」に際しては、名高い次の歌を詠んだのである。

手枕（たまくら）は花のふぶきにうづもれてうたた寝さむし春の夜の月　　歌子

『伝記』(p. 124) はこの詠に「春宵一刻の歓びを歌つて艶麗比（たぐゐ）無く、句々玉振の響きを帯び、妙齢佳人の作として眞に千古の絶吟」と、惜しみない賛辞を贈っている。

通説によれば、美子（はるこ）皇后（昭憲皇太后）の琴線に触れたのはこの作品であり、これによって平尾鉐（せき）は「歌子」の名を賜ったということである。しかし小林 (2013) は、当時の新聞記事や父・鉐蔵から歌子宛ての手紙を検証し、歌子名は宮中出仕を始めた年内に賜ったと実証的に示している。また、年が明けなければ御題「春月」はないであろうことも根拠に、歌子名は「春月」による下賜ではないと結論づけている。

結局のところ「この一首のみによつてかかる無上の光栄に浴したといふよりは、寧ろかうした数々の秀吟」(『伝記』p. 124) に基づいての命名であろうというのが正しいと思われる。しかしながら、この問題については別稿でまた論じたい。[6]

3.3. 楓内侍（かえでのないし）・税所敦子（さいしょ）(1825-1900)

税所 敦子[7]

ここで、歌子の宮中生活における敷島の道に多大なる影響を与えた、税所敦子について述べておく。敦子は京都の公家侍の家に生まれ、歌子に勝るとも劣らぬ利発な少女で、父・林篤國から和歌を習っていた。20歳で薩摩藩士・税所篤之の後妻となるが、若くして父母のみならず夫と幼子にも死なれた敦子は、一女とともに鹿児島に移り住む。そこでは姑を始めとする、亡き夫の大家族に仕える苦労と忍耐の日々であった。あるとき意地悪な姑に対して、

仏にもまさる心を知らずして鬼婆なりと人はいふらむ　　敦子

と詠んでみせたところ、姑は涙を流して改心したという逸話は、後の修身の教科書に採り

上げられたほどである。そのような人徳や教養を見込まれた敦子は1857年、薩摩藩主・島津斉彬(なりあきら)の子女の傅育係に任命された。ほんの1、2年で斉彬公と若君・哲丸が立て続けに亡くなると、敦子は殉死しようとしたが姑にかき口説かれ、思い留まった。

島津家の貞姫が近衛家に輿入れした際、随行して実の娘とともに京都に戻ったのが1863年、敦子38歳の時である。貞姫や京都の公家の姫たちに古典や和歌、書道を敦子が教えた中に、ひときわ聡明な一条勝子(まさこ)（のちの美子(はるこ)皇后）がいた。明治の代となり、周囲の推挙と、何より皇后の所望を得て敦子が宮中に出仕し、歌子に巡り合った1875年には、50歳になっていた。ほどなく職位は権掌侍(ごんのないし)に抜擢され、紅葉のような佇まいを形容されて「楓内侍(かえでのないし)」と称えられた。(平井(2001：154-155))

敦子と歌子はまさに母と娘の年の差であったが、八田師匠の生前、時期は違えど同じ門下であったという偶然も得てたちまち懇意となり、歌子は敦子を「楓の君」と呼ぶようになる。『伝記』(p. 143)によれば「年齢のへだたりをも忘れて…性格も、嗜好も、この先輩と後進とは、ぴつたりと合致して」いた二人は、以後25年間、ことあるたびに短歌を贈り合い、友情を育んでいった。1888年には、敦子は『御垣(みかき)の下草』という歌集を上梓し、これは当時の婦人の詠歌入門書と言われるほど高く評価された。

1899年は、下田歌子校長を擁した実践女学校創立の年であった。陰に陽に協力を惜しまなかった敦子は、これを祝して次の一首を寄せている。

をとめ子の学(まなび)の窓の呉竹はふしたたざるやみさをなるらむ　　敦子

ところが喜びも束の間、翌年に敦子は急病により他界してしまう。歌子は悲嘆にくれながらも、敦子のため実践女学校を挙げて初七日の法要を営み、友情切々たる弔辞を読んだ。(『伝記』第4章第5節、平井(2001)、村上(2015：No. 5))

3.4.　晩年の歌

もしかすると歌子は、敦子逝去の折に、自身の歌集を出すとしたら『雪の下草』という題にしようとすでに決めていたのかもしれない。弔辞の中で自らを「雪の下草」と称した歌子は、32年後、喜寿の記念に『香雪叢書』第2巻として出版した歌集を『雪の下草』と名付けた。これは敦子の歌集『御垣の下草』に呼応する題であり、歌子はこの題名をもって、敦子との友情を永遠に偲んだのである。

『雪の下草』は、幼少期から晩年までの「単に己が好きなるが故に、意の趣くに任せてうめき出たるもの」を並べたという歌子のはしがき(下田(1932：3))は、もちろん謙遜にすぎない。村上(2015：No. 3)が見たところでは、この歌集は「短歌1251首のほか俳句・長歌・今様・漢詩を擁して、堂々たる詞華集(アンソロジー)」であり、「流麗な調べを奏でる品格のある

歌であり、それ程苦労することなく詠じられた自然体作品」である。

しかしながら元来強健とはいえず鍛錬と精神力をもって働き続けてきた歌子は、70歳を超えると皮膚の随所に発疹を催すようになり、1931年には乳房のそれが癌化して摘出手術を受けた。76歳での大手術であり、驚愕や不安に陥れまいと生徒らには伏せたまま、東京帝大病院で約40日間にわたる入院であった。(『伝記』pp. 646–649)

晩年の作として有名な次の歌は、この頃に詠まれたのではないかと推し量られる。

呉竹のふしどの中(うち)に学びえし道を傳へむまてや教へ子　　歌子

『伝記』(pp. 639–640) はこの歌を1936年7月に別の病で2度目の手術を受けた際に、「かつて秀吟『呉竹のふしどの内に學びえし道を傳へむまてや教へ子』と歌った身の、こたびはまたその病中にも、…つねに教へ子や職員たちの安否をわづらひ暮らして居られた」と引いている。この歌に表された強固な意志の通り、歌子は1932年の新春とともに教壇に復帰し、再び職務に精励する日々となったそうである。(『伝記』p. 650)

80歳を迎えると、『伝記』(p. 654) によればまず両足が、次に右手が思うように動かなくなり、歌子は左手でものを書くようになる。加療の甲斐なく不治の病に倒れ、偉大な生涯を閉じたのは1936年、満82歳であった。3. 2. で述べたように、その前年には故郷の岩村に、「綾錦」の顕彰碑が建てられたのを歌子は見届けていた。

4.　英語で詠みなおす歌子の短歌

この節では、筆者が歌子の短歌を英語に翻訳した順に、推敲した過程も含めて述べていくことにする。訳し出すのは第3節に背景を記した5首である。

4.1.「春月」

手枕(たまくら)は花のふぶきにうづもれてうたた寝さむし春の夜の月　　歌子

無謀にも名高い代表作から着手したが、find / found oneself ～ing「気が付いたら～していた」を文の骨格にしようと決めていた。そして原詩では「手枕」が先で「春の夜の月」が後回しであるが、最初に場面を設定したほうがよいかと、under / beneath the moon of springという直訳を経て、満月の月あかりを想い起こし、次のように考え直した。

In the moonlight of spring
I found myself slumbering

With my head upon my arm,

3行目ではonよりリズムのよいuponを採用した。[8]

残るは「花のふぶきにうづもれて」と「さむし」であるが、原案はこうであった。

Feeling cold as cherry petals are like snowflakes
Falling down on me.

しかし冗長な直喩はやめにして暗喩にし、さらにfeelingを削り、ただ「落ちる」のでなく「舞い落ちる」ようにfallをflutterに変えた。

~~Feeling~~ Cold as cherry petals are ~~like~~ snowflakes
~~Falling~~ Fluttering down on me.

すると「うづもれて」がないことに気が付いたので、前置詞をoverにして、その感じを出すことにした。したがって次のように訳出して完成された。[9]

In the moonlight of spring
I found myself slumbering
With my head upon my arm,
Cold as cherry petals are snowflakes
Fluttering down over me.

4. 2. 「綾錦」

次に英訳を試みたのは、「綾錦」の歌である。

綾錦着てかへらずば三國山またふたたびは越へじとぞ思ふ　　歌子

この歌には、「綾錦」と「三國山」という2つの固有名詞が出てくる。三国山は当時、美濃・尾張・三河の三国の境にある山であったのでこの名が付いたらしい。これを1行目に用いて原案の出だしは、

Looking back at Mount Mikuni –
My hometown is beyond there.

としてみた。ここで2行目は、アメリカ人同僚2人からMy hometown lies beyondと直された。筆者には思いもよらない言い回しであった。

次にこの歌の中核は、Not until 〜 に倒置文を後続させる構文にしようと決めていたが、Notより語気が強くなるNeverを用いることにした。

Never until I make a success
Shall I return again,

筆者は何となくbecome successfulかmake a successが正しいのであり、become a successとは言えないのではないかという思い込みがあったのであるが、これもアメリカ人同僚からbecome a successでよいと直された。なお、return againは冗長な気もしたが、原詩も「またふたたび」と畳みかけており、returnだけでは短すぎるのでagainを重ねた。

もう一つの固有名詞「綾錦」は絢爛豪華な織物の一種である。日本人なら誰しも「故郷に錦を飾る」という慣用句が思い起こされるのだが、これを英語でどう伝えるか。慣用句の直訳come home in gloryを参考に、説明的にglorious *kimono*を身にまとって正装させることにした。[10] したがって最終案は次の通りである。

Looking back at Mount Mikuni –
My hometown lies beyond.
Never until I become a success
Shall I return again,
Attired in glorious *kimono*.

4. 3. 「道を伝へむ」

呉竹のふしどの中(うち)に学びえし道を傳へむまてや教へ子　　歌子

晩年に病を得た歌子の詠であるが、これには掛詞が含まれている。掛詞は、同音異義語の多い日本語で多用される詩の技巧であるが、ここでは「ふしど」に、竹の「節」と病床の「臥所(ふしど)」が込められている。筆者の原案は、

While sick in bed
I have elaborated the way of academism
Embedded in the nodes of bamboos.[11]
I shall show you –

Some fine day, my students!

である。1行目にin bedと記して即座に、後でembedを使おうと決めた。英語圏ではさほど洒落・地口（pun）は重用されないが、短歌で積極的に訳し出す方針を貫くのはマクミラン（2017）/ MacMillan（2018）である。マクミラン（2019）は、

> 日本語でも英語でも同じように掛詞がはまるのは稀（まれ）だが、…うまく翻訳できると、日本文化の複雑さを英語で伝えることも決して不可能ではないのだと、気持ちを奮い立たせられる。

と述べており、筆者も同感である。

「学びえし」は現在完了相を用いることにして、「学ぶ」は素直にstudy、少し凝ってexplore等を考えたが、中にlaborという語が入っていて苦労がにじみ出るelaborateを使うことにした。「道」はそのままにしておくわけにはいかず、「何かの道」にしなければならない。「学問の道」であろうと当初はacademismと訳していたが、どう見てもどう聞いても、この語は周囲から浮いていた。しばらく放置していたが、数日経ってphilosophyを思いつき、[f]音と[s]音が重なるのが流麗に思われたので、これに決めた。

後半は、「までや」ではなく「いつの日か見せよう」と意訳することとし、somedayでは短すぎるのでsome fine dayとした。するとsickとfineの対比が現われ、5行目も[s]と[f]が響き合うようになった。最終的には、次のような訳である。

> While sick in bed
> I have elaborated the way of philosophy
> Embedded in the nodes of bamboo.
> I shall show you –
> Some fine day, my students!

4.4. 「元旦」

少女時代と晩年の歌が出来たところで、歌子の人生初の作品を英訳してみた。

> 元旦はどちら向いてもお芽出たい赤いべべ着て昼も乳呑む　　歌子

この歌にはかなり大胆な意訳を施し、3行目には母・房（ふさ）を登場させ、最終行には満3歳で詠んだことを読者に知らせる説明を付け加えた。

Happy New Year –
Everyone looks joyful everywhere.
Mom dressed me up in red,
Breastfeeding me for lunch
– Big baby at age three!

「ベベ」という幼児語に相当する英語が筆者にはわからなかったので、3歳では自分で服は着られないはずだから、乳をやる母親に着せてもらうことにして子供らしさを演出した。また、せめて「ベベ」と音が似ているbabyを含めることにした。

一応これで拙訳は出来たのであるが、全体的に意訳しすぎた感も否めないので、1行目を原詩に忠実に「元旦」で訳そうかと思案中である。すなわち、

On New Year's Day
Everyone looks happy everywhere.
Mom dressed me up in red,
Breastfeeding me for lunch
– Big baby at age three!

このようにして2行目にhappyを用いるのである。しかし村上（2015：No. 4）が、この歌の「上の句は、大人の会話そのまま」と述べているのに筆者は共感するので、口語的な挨拶Happy New Yearのままのほうがよいかもしれない。

4. 5. 「夕立の後」

これまでに景色の歌を1首、強固な意志の歌を2首、幼児期の純真な歌を1首と訳したところで、風景の歌をもう1首選んで訳してみた。

夕立のはれて薄霧立ちこめて雲ゐに見ゆる山の峯かな　　歌子

この歌はほとんど直訳にしたが、近景から遠景に目を転じる箇所で、2.3.に紹介したロイド・松浦訳の「春月」を真似てloを挟んでみた。また、冠詞には自信がないのでアメリカ人同僚の指示を仰いで、次のような原案を見せた。

An/The evening rain ceased –
Mist is veiling around here.
But lo, you can see
(the) Mountain ridges among clouds
In a/the far distance.

２行目のveilは他動詞なので覆う対象がなければならず、それがなければformやgatherを用いるべきだと指摘され、以下のように直した。

The evening rain ceased –	[si:st]
Mist is forming all around.	[əraʊnd]
But lo, you can see	[si:]
Mountain ridges among clouds	[klaʊdz]
In the far distance.	

すると思いがけず、子音は異なるが脚韻の効果も現われたので、出来栄えに満足した。

5. おわりに

以上のように本稿は、歌子が幼児期に詠んだ愛らしい１首と、風景を詠んだ２首、強固な意志を表した２首を採り上げて英訳を試みた。形式はマクミラン（2017）/MacMillan（2018）にしたがって５行自由律を踏襲した。脚韻は原則として踏まないが、たまたま現れたら歓迎し、必要あれば固有名詞は説明的に意訳を施し、掛詞はできるだけ再現しようとした。

歌子が、花鳥風月を愛でる繊細な感受性と、意志を貫こうとする強靭な信念を併せ持った歌人であったことは、本稿が示した通りである。しかしいうまでもなく、ここに拙訳した５首のみならず、歌子はおびただしい数の優れた短歌を残している。イギリス留学中に詠まれた短歌は、英訳にふさわしいであろう。また、みの（2016：177）によれば歌子には恋愛を詠んだ短歌はほとんどないそうであるが、発掘できたら訳してみたい。本稿で試みた訳し方でよければ、さらに訳詩を増やしていきたいと思っている。

謝 辞

本稿は、2019年６月19日、米国ベイパス大学女子学生向けの「オープン講義c」、及び７月17日、下田歌子記念女性総合研究所第２部門研究会での口頭発表に基づいて執筆さ

れた。聴講してご意見をくださった方々に感謝申し上げる。中でも、発表前から英訳に惜しみない助言をくださった、アメリカ人同僚のJuergen Bulach教授とJacob Schnickel准教授に深謝する次第である。

注

1 石原・ラインフェルド（1997：i）によれば、1996年に *The Game of 100 Poems: "Hyankunin Isshu"*（私家版）という、上の句と下の句に分かれるカードとして出版したのが先である。

2 ただし2行目末がon [ɔn]、4行目末がshone [ʃoʊn]、5行目末が gone [gɔn]のように、類似した母音で合わせた脚韻も1例（第68首、三条院）あった。

3 ロイド・松浦（1907）は、この「春月」以外、本稿で英訳を試みる短歌を採り上げていない。したがって本稿では、これ以上この訳書を取り扱わないこととする。

4 「東路の日記」は『香雪叢書』第1巻の巻頭を飾り、『伝記』(pp. 97–101）にも全文が再録されている。

5 実践女子学園HPによれば、三国山の頂上にも同じ歌を刻んだ歌碑がある。これより後の建立であると思われる：https://www.jissen.ac.jp/school/shimoda_utako/articles/index.html

6 御題「若菜」の際の詠進歌によって「歌子」を賜ったのだとする牧野（2011）や童門（2018）の文献もある。しかし小林（2013：354）は、「若菜」と「我が名」は掛詞になるので、

　　程もなき袖にはいかがつつむべき大内山につめる若菜を　　歌子

は、歌子名が下賜された答礼の作であり、時系列は逆であると考察している。他方、村上（2015：No. 5）は、どの歌による栄誉なのかは歌子が意図的にぼやかして「自己韜晦（とうかい）」したのではないかと推測する。

7 『伝記』(p. 142）にも収録された著名な肖像写真。

8 Uponによって3行目がアクセントを弱強で繰り返す'iambic'という2拍子になる（竹林・斎藤（2008：176））：　Wíth / my / héad / up/ón / my / árm

9 後半の現在時制areに合わせて、foundをfindにしようか迷ったが、"*found* is fine in that it can be interpreted that the person has already fallen asleep while the snowflakes are falling down at that time." (Juergen Bulach, p.c.) とのことである。

10 マクミラン（2017）/ MacMillan（2018）も固有名詞を説明的に訳し出す傾向がある。例えば先に引用した蝉丸の歌では、「逢坂」はMeeting Hillと翻訳されている。

11 アメリカ人同僚の助言に従い、bamboosはbambooに直した。

参考文献

童門冬二（2018）「家庭こそ最良の学校です　下田歌子先生の生き方・考え方」『恵那市ふるさと学習読本』vol. 4 ふるさと人物編① 恵那市教育委員会.

林真理子（1993）『ミカドの淑女（おんな）』新潮文庫.

平井秋子（2001）『楓内侍――明治の歌人 税所敦子』創英社 / 三省堂書店.

石原敏子（2012）［講演録］「短歌の英語翻訳――与謝野晶子と『小倉百人一首の実例をとおして』――」『関西大学外国語学部紀要』第6号, pp. 119–138.

石原敏子、リンダ・ラインフェルド（1997）『対訳・百人一首――*One Hundred Poets, One Hundred Poems*』関西大学出版部.

実践女学校 編（1943）『下田歌子先生傳』故下田校長先生伝記編纂所．
実践女子学園（企画広報部）編（2019）「今も輝き続ける『実践』のひと 下田歌子」
小林修（2013）「下田歌子の宮中出仕と、“歌子”名下賜前後の考察」『明治聖徳記念学会紀要』復刊50号，pp. 350–364.
リービ英雄 訳（2014）中西進 解説『*Man'yō Luster* 万葉集新装版』パイ・インターナショナル．
ロイド、アーサー、松浦一 訳（1907）下田歌子 原作『皇國ぶり』春陽社．
マクミラン、ピーター・J（2017）『英語で読む百人一首』文春文庫．
MacMillan, Peter（2018）*One Hundred Poets, One Poem Each —A Treasury of Classical Japanese Verse*, Revised edition, Penguin Classics.
マクミラン、ピーター（2019）「星の林に――ピーター・マクミランの詩歌翻遊」朝日新聞 2019年9月4日 朝刊21面．
牧野和子（2011）杉原萌 原案、実践女子学園 監修『きらり うたこ』小学館．
みのごさく（2016）『日英同盟かげの立役者――下田歌子：女子教育に一生を捧げた女性』Imagination Creative.
村上廣元（2015）「下田歌子先生について」I, II, III.『下田歌子研究所ニューズレター』No. 3（3月），pp. 4–5；No. 4（6月），pp. 6–7；No. 5（10月），pp. 4–5.
長岡剛（2016）『近代日本を創った7人の女性』PHP文庫．
仲俊二郎（2014）『凛として――近代日本女子教育の先駆者下田歌子』栄光出版社．
Porter, William N. (1979) *A Hundred Verses from Old Japan*, Tuttle Publishing.
Rodd, Laurel Rasplica, and Mary Catherine Henkenius (1996) *Kokinshū —A Collection of Poems Ancient and Modern*, Cheng & Tsui Company (originally 1984, Princeton UP).
佐藤紘彰（1991）［講演録］「日本詩歌の英訳――俳句・短歌の行分け再考――」同志社大学，pp. 121–141.
佐藤紘彰（1993a）『アメリカ翻訳武者修行』丸善ライブラリー．
佐藤紘彰（1993b）「短歌の英訳――A・ウェイリー再訪――」上智大学，*The Journal of American and Canadian Studies*, No. 10, pp. 71–89.
Sato, Hiroaki and Burton Watson（1981）*From the Country of Eight Islands*, University of Washington Press.
下田歌子（1932）［歌集］『雪の下草』『香雪叢書』第2巻，実践女学校出版部．
スタム、J. 訳（2017）俵万智 原作『英語対訳で読むサラダ記念日』新装版，河出書房新社．
竹林滋・斎藤弘子（2008）『新装版 英語音声学入門』CD付，大修館書店．

（むらかみ　まどか／下田歌子記念女性総合研究所 兼務研究員・文学部英文学科 教授）

An Attempt to Translate Shimoda Utako's Poetry into English

MURAKAMI Madoka

In this article, I analyze the process of translation of traditional Japanese *tanka* poems composed by Shimoda Utako (1854-1936). They are her five famous works, namely 'New Year's Day,' 'Evening Rain,' '*Ayanishiki* [glorious *kimono*],' 'Spring Moon,' and 'Way of Philosophy' in chronological order.

Before dealing with Utako's poems, I discuss in Section 2 how *tanka*, consisting of 5-7-5-7-7 syllables or morae in Japanese, should be formulated into English verse. There are two points to consider: how many lines *tanka* should take and how many syllables it should sound in English. By examining relevant literature, I conclude, following MacMillan (2017; 2018), that it is appropriate to put Japanese *tanka* into free verse with five lines in English, discounting the number of syllables. Additionally, English *tanka* need not rhyme, but *kakekotoba* [pun] should be preserved in English whenever possible.

In Section 3, I describe the background of Utako's five *tanka*, from 'New Year's Day' in her childhood to 'Way of Philosophy' in the twilight of her life, by referring to her personal history as a poet. It is well-known that in 1892, as soon as starting to work for the Meiji Court, her poetry was so highly praised that she was endowed with the name *Utako* [poetry-girl] by the Empress. Her colleague and best friend, Saisho Atsuko (1825-1900), was also very important in her life of poetry, with each influencing the other on their creativity.

Section 4 presents my English translations of those five *tanka*, while discussing the process towards the final versions. One of them, 'Spring Moon,' as in *Tamakura wa Hana no fubuki ni Uzumorete Utatane samushi Haru no yo no tsuki*, is translated as follows:

In the moonlight of spring
I found myself slumbering
With my head upon my arm,
Cold as cherry petals are snowflakes
Fluttering down over me.

Summing up, as illustrated in 'Evening Rain' and 'Spring Moon,' Utako often admired scenic beauty in her poetry. On the other hand, she expressed her strong willpower throughout her life, as seen in such poems as '*Ayanishiki*' and 'Way of Philosophy.' I hope I have conveyed in my translations how impressive her *tanka* are and how distinguished a poet she was as well as an educator.